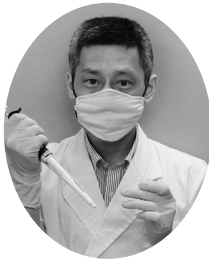


---

巻頭言

---



## 今こそ学会誌による情報発信を

染谷信孝

(編集委員長 農研機構)

2020年から学会誌「土と微生物」の編集委員長を担当しています。就任前は、宍戸雅宏・前委員長および豊田剛己・元委員長の下で編集委員を務めてました。編集委員を始めた時は、東日本大震災も起きておらず、10年後にCOVID-19(新型コロナウイルス感染症)で世界中がこのような状況になるとは夢にも思いませんでした。この度、巻頭言の担当順番が回ってきたことで何を書いたらよいかと思い、「学会」、そして学会における「大会」と「学会誌」について考えてみました。

学会は通常、「研究者が自己の研究成果を公開発表して科学的妥当性を検討・論議する場であり、同時に研究成果を発表する場の提供業務や研究者同士の交流などの役目も果たす機関でもある」と説明されます。学会に所属する研究者にとって「大会」は重要な場ですが、現在、ほとんどの学会で「大会」は中止もしくはオンライン開催を余儀なくされています。再び、対面式大会が開催できることを願います。一方でこのような状況でも情報発信源としての「学会誌」の存在を大切にしたいと、会員の皆様へ研究成果のご投稿をお願いしたいと思います。

「土と微生物」誌には以下の編集方針が掲げられています。

1. 土壌微生物(ウイルス、細菌、菌類、原生動物、線虫等)の個生態や実験手法、土壌微生物群集の構造・機能や実験手法、土壌微生物と作物生産の関係、土壌微生物による環境浄化等、土壌微生物に関する情報発信に努める。
2. 原著論文(ノートを含む)では、新規性に重点が置かれるが、貴重なデータ(例えば圃場データ等)の記録を出来る限り残すことにも努める。
3. 若手研究者の登竜門として、原著論文、総説、解説の投稿を奨励し、原稿審査プロセスを通して、若手研究者の育成をはかるとともに会員への幅広い情報発信に努める。

上記方針から分かりますように、本誌は会員からの成果発信を可能な限り掲載していくことを第一方針としています。投稿論文は、編集委員が丁寧・親身に審査を担当して可能な限り掲載に至るように協力いたします。私としては、編集委員の先生方、そして査読をお引き受けいただいている審査員の方々には感謝しかありません。会員の皆様におかれては、若手もベテランも、それぞれの研究成果の発信、残すことに努めていただき、これまで以上の積極的なご投稿をお願いいたします。そして、「学会誌」の更なる充実と併せて、再び対面式「大会」で会員間の交流ができる日を願っております。